

アンドレ・ジッダの『放蕩息子の帰宅』：批評校訂 版作成のための覚え書

吉井, 亮雄
北海道大学言語文化部助教授

<https://hdl.handle.net/2324/19383>

出版情報：言語文化部紀要．(16)，pp.165-186，1989-08-01．北海道大学言語文化部
バージョン：
権利関係：



アンドレ・ジッドの『放蕩息子の帰宅』

——批評校訂版作成のための覚え書——

吉 井 亮 雄

1 ジッド研究の現状と批評校訂版の意義

今日までのフランス本国におけるジッド研究を概観すれば、大別して二つの時期をその重要な転換期として指摘することができよう。第一は、一九五一年の作家の死を契機とした本格的な作品研究の開始であり、この点では、一般読者の場合も含めて、ジッドに対する熱が、実存主義の流入・席卷に次いで、五〇年代半ば以降急速に下火になった我が国の事情とは大いに趣を異にする。第二は、一九六八年発足の「ジッド友の会」(『会報』の発行元は長らくリヨン第二大学だったが、八五年からはモンペリエ第三大学、次いで八九年からはパリ第一〇大学に移った)を基盤とする組織的な実証研究の開始であり、以後、同種の活動はすべてこの流れのなかに位置づけられると言っても過言ではない。

周知のように、芸術的領域にとどまらず、宗教、倫理、思想、政治について、そして同性愛に関してまでも、自身が抱えるさまざまな苦悩に端を発した問題提起を続け、しかも、しばしば前言訂正を恐れることのなかったジッドの姿勢は、熱烈な賛同者を獲得すると同時に、それに数倍する多くの論敵を生むことになった。そのような事情を反映して、彼の存命中に発表された研究は、いくつかの例外を除けばおおむね、なんらかの既定方針に基づいてなされた断罪、あるいは共感の表明の域を出るものではなかった。しかし、常にスキャンダラスな存在であり続けたこの大作家の没後は、次第に、党派性を排し純粹に美学的見地に立つ研究の必要性が説かれ始め、その結果、主として小説技法の考察を中心に据えた論文・著作がフランスおよび英・米で相次いで発表される。一九五〇年代から六〇年代にかけて特に盛んであったこの研究方向自体は、現在もなお主要な潮流の一つとして豊かな成果を生み続けているが、作品分析が進

むにつれて同時に、ジッドにあつては「生」と「作品」が不可分の関係にあるにもかかわらず、その豊饒で多岐にわたる創作活動に対する実証的解明が大きく立ち遅れていることが痛感され始める。⁽²⁾ 研究者たちが抱いたこの認識が、おりしも隆盛を極めていた構造主義の排撃する伝統的実証研究への反動的郷愁によるものでないことは言うまでもない。とりわけ、斯界の第一人者として、ジッドにまつわる神話の解体と、彼の新たな全体像の構築を期したクロード・マルタンは、定期的に現状報告を発表し、作品の正確な理解と「作家的自我」の十全な把握のためにはなによりも、自筆原稿や各種刊本の校合による信頼に足る批評校訂版の確立、書簡集をはじめとする一次資料の公刊が急務であると説く一方、情報⁽³⁾の集積と研究の国際化を図るために、上記「友の会」の発足に次いで、リヨン第二大学に「ジッド研究センター」を設立したのである。以後、マルタンが示した指針に従い、各往復書簡集の準備・刊行が順調に続くかたわら、将来の「総合書簡集」出版に向けて、既刊・末刊を問わず、また文通者の有名・無名にかかわらず、ジッドが書いた手紙および彼に宛てられたそれ(総計二万五千通前後と推定される)の網羅的目録の作成も大半が完了している。⁽⁴⁾ 一方、批評校訂版については、現時点ではその名に値するものは数点しか刊行されていないが、自筆原稿類の閲覧が困難な状況にあるもの(『パリュード』、『贗金つかい』など)を除き、主要作品については分担が決まり、それぞれ準備が進められている。⁽⁵⁾ 付言すれば、『放蕩息子⁽⁶⁾の帰宅』(以下『放蕩息子』と略記)に関する筆者の試みは、こういった組織的作業の一端を担うべく

企図されたものである。

ところで、年代的に『背徳者』、『狭き門』の二作に挟まれた『放蕩息子』は、成熟期を迎えたジッドにとって一つの里程標とも呼ぶうる重要作であるにもかかわらず、執筆前後の関連資料の多くが未だ公刊されておらず、当時のジッドの精神状態を正確に把握することが困難なためもあって、これまで十分に研究・論議されてきたとは言いがたい。ただ、そういった点についてはすでに他稿で詳しく論じたので、⁽⁶⁾ 自筆原稿類や各種刊本の物理的側面を中心に考察する本稿では、次節以降での論旨展開に最低限必要と思われる範囲で、作品に関する情報をごく簡単に確認するにとどめよう。

大胆な聖書解釈を独特な文体と古典的な構成のなかに盛った『放蕩息子』は、ジッドが一九〇七年一月下旬に画家モーリス・ドゥニを同伴したドイツ旅行からパリに帰った直後に着手され、実質的にはわずか二週間で書き上げられた。自筆完成原稿にして二六枚、プレイアド版『作品集』で一六頁という小品ながら、この着想後まもない執筆開始と短期日での完成は、ジッドにあってはきわめて異例のことで、先立つ状況を考慮すればなおさらその感を強くせざるをえない。それまでの彼はしばしば、一九〇一年末の『背徳者』完成以来「もはや真面目な仕事は何ひとつしていない」と嘆いていた。事実、この数年間にはこれといった見るべき著作の発表がないばかりか、着想後すでに一五年近く経つ『狭き門』は相変わらず難行を続けていたし、同じく長い歴史をもつ『法王庁の抜け穴』に至ってはようやく粗筋が固まり始めていたにすぎないのである。こういっ

た長期間にわたる創作活動の沈滞とは対照的に、大きな高揚のなかで『放蕩息子』執筆に取り組む作家の姿を当時の『日記』は断片的に伝えているが、同じことは未刊文献がもたらすいくつかの情報からものはつきりと窺われる。一例を挙げれば、この作品の仏独二カ国語同時出版（季刊誌『詩と散文』⁷およびベルリンの月刊文学誌『ノイエ・レントシャウ』）の計画が遅くとも執筆半ばの二月一二日には存在していたのが確実で、短い作品ゆえに実現が比較的容易であったにせよ、ジッドにとって前例のないこの試みは、彼が完成前から自作に対して抱いていた並々ならぬ自信を裏付けるものと言えよう。その後、同月二〇日頃には早くもフランス語原文の自筆原稿が完成し、三月初旬からは、マルセル・ドゥルーズとジャック・コポーに交互に意見を求めながら「一週間を費やして」テキストを修正している。ジッドが次のように振り返って語るのは、これらの作業が一段落ついた三月一六日である。

数日前、『放蕩息子』を完成した。ベルリンでいきなり詩の構成を思いついて、早速仕事に取りかかったのだ。着想後ただちに実行に移したのはこれが初めて。あまりに長い間温めておくと、主題が膨張し、歪んでくる恐れがあった。というよりは、書かないでいることに飽きがきていたし、私が抱いていた他の主題はすべて、すぐに取り扱われるにはあまりにも多くの困難を呈していたのだ。⁽⁸⁾

さて、以上のように『放蕩息子』は異例の早さで、しかも自信を

もって書き上げられたわけだが、その作品としての意味を問うためには、ジッドの精神状態に影響を及ぼしていたであろう諸要素、とりわけ、彼にカトリシズムへの改宗を求めていたポール・クロードル、フランス・ジャムとの関係の再考が欠かせまい。なぜならば、雑誌掲載後まもなくのクリスチアン・ベック宛書簡が「状況に想をえた」という言葉で作品誕生の背景を説明しているように、直接的には福音書の寓話（ルカ伝、一五・一六—三二）に題材を採ったこの作品には、一九〇五年末から翌年半ばにかけてジッドが兩人と交わした宗教的対話が色濃く投影されているからである。当初は、「精神の憂鬱な麻痺」⁽¹⁰⁾を逃れんと願っていた彼の方からクロードルに接近した。クロードルも、そこに改宗の前兆を見ないわけにはいかない。しかし、対話が進むにつれて、自己の内部で相反する諸要素の葛藤をあくまでも芸術の支配のもとに描こうとするジッドは、次第に、宗教と芸術の乖離に悩まされることはないと言言するカトリック作家の主張をあまりにも教条的であるとみなし始め、再開された『狭き門』の執筆にとっても危険ですらあると考える。そして、一九〇六年五月には、議論を引き継いでいたジャムから冷やかな手紙を受けたのを機会に、それまでの誤解を晴らすべく、「クロードルに彼の神があるというならば、僕には僕の神がある」⁽¹¹⁾と自分の立場を明らかにしたのである。

この決然たる態度表明に「ジッドの心身両面での苦悩の消滅」⁽¹²⁾を見ようとする研究者は少なくない。しかしながら実際には、これを契機に、とりわけ精神面での重大かつ急速な悪化という逆説的事態

が招来されるばかりか、以後の回復もきわめて緩慢にしかなされないのである。しかも、容易には抜け切れぬ危機に対して慨嘆を繰り返しながら、ジッドは、その直接的誘因として、ジャムの上記書簡を『放蕩息子』執筆の直前まで一貫して意識し続けねばならないのである。一連のアンドレ・リュイテルス宛未刊書簡が明らかにするこの事実、宗教的議論においては「恐るべき外科医」クロードルに比べ「ひとの好い、いかにも力量に欠ける田舎医者」⁽¹³⁾と従来軽視されがちなジャムの存在が、この時期のジッドの精神生活に及ぼしていた影響の大きさを証するものでもある。そしてさらに看過できないのは、ジッドの揺れ動く精神状態——とりわけ、二人の論敵が示すであろう反応に対する消し難い不安——が作品完成後も依然として続いたことであり、当該時期の未発表資料が教えるこれらの諸点を考え合わせれば、ジッドが兩人との関係をはじめとするさまざまな困難を『放蕩息子』以前に解消していた、あるいは同作執筆によって一挙に追い払ったとはとうてい思われない。彼にとつての問題はむしろ、現時点では未だ解決しえない個人的苦悩をいかに表現するか、そして、作家的意識に支えられた虚構という手段によってその苦悩を対象化・客体化し、時間の経過とともにやがてそれを乗り越えようと期待すること、この一点にかかっていたとする方が、前提的にも、また『狭き門』の順調な完成をはじめとする以後の着実に豊かな創作活動の展開に照らしてみても、はるかに説得的であると言ふべきであろう。したがって今後は、そういうジッドのありうべき意識の反映を『放蕩息子』のなかに求め、確認する試みが推

し進められねばなるまい。以上のような問題意識に立てばなおさら、複数的読解を拒むことなく（むしろ逆に、その領域をさらに広げつつ）、「テクストの歴史」の再構築を目指す批評校訂版の存在意義は決して小さなものとは思われない。

2 自筆原稿／タイプ稿／校正刷

今日までに存在が確認された『放蕩息子』の自筆原稿は二種類あり、いずれもクロード・マルタンの『ジッドの壮年期』上巻末に付された書誌に指摘されている。⁽¹⁴⁾一方は作家の遺産相続人であるカトリヌ・ジッド女史の個人蔵、他方はパリ大学付属ジャック・ドゥーセ文学図書館（以下ドゥーセ文庫と略記）所蔵である。前者の概要から述べると、これは「母」と題された『放蕩息子』第四章の約五分の三（作品全体の七分の程度）に相当する部分稿であり、判形三五×二一〇ミリのダブルリーフ一葉、計二頁分の全面を、鉛筆または黒色インクで書かれたテクストが覆っている。削除や加筆は豊富で、加筆はときに欄外にまで及ぶ。この部分稿がいわゆる「下書き premier jet」とみなしうるものであることは、鉛筆とペンの交互使用、綴り字の誤りや文意の不明瞭な箇所をいくつか含む乱れがちな書体、粗筋に関する覚え書と推定される記述の存在などから疑えない。また、紙片は頁付を欠くものの、記載テクストの冒頭および末尾で登場人物間の対話が唐突に開始・中断されていることから判断するならば、少なくともこの前後、おそらくは作品全体について同

種の草稿が存在しなかったとは信じ難い。なお用紙は、ジッドが愛用していたイタリアのボレーリ社製漉入紙で、同社名が牡鹿の絵とともに透かし模様として入る。

これに対し、ドゥーセ文庫に保管されているのは完全稿である(同文庫整理番号 N1662 BY24)。現存する部分的草稿と、この完全稿の対応箇所を比較対照すれば、後者が、字句の訂正を交えながらも、前者をほぼ忠実に転写したものであることが容易に了解される。たしかに後者の冒頭および末尾の数頁には削除や加筆が若干数認められるが、これらの大部分は、その内容と方法から、当該箇所あるいは作品全体の転写後に施された新たな修正と断定しうるものである。終始黒色インクを使用し、一定のリズムを崩さぬ整った書体からも「清書稿 *mise au net*」としての性格は明らかだが、その作成開始時期に関しては、「昨晚『放蕩息子』の出来た部分を読み返す。直すところはほとんどない」という二月一六日の『日記』の記述が清書作業のことを語っているとすれば、「下書き」がすべて終了した後であったとは必ずしも言い切れない。この清書稿の構成は、部分稿と同じボレーリ社製の漉入紙二六枚分(判形も同様、ただし大半はシングルリーフ)と、透かしはないが、紙質からやはり同社製と推定される紙を一〇八×二一〇ミリの大きさに裁断した小紙片一葉からなり、いずれも片面しか使用されていない。ジッド自身は頁付を行っておらず、各紙片に鉛筆で打たれた一連の番号は、ドゥーセ文庫の初代司書を務めたマリ・ドルモワによる。⁽¹⁷⁾ 大蒐集家として著名なジャック・ドゥーセがこの自筆原稿を入手したのは、まず間違いなく一九一七

年半ば頃のこと、パリの古書店主カミーユ・ブロックの仲介によるものと思われる。⁽¹⁸⁾ その後、ピエール・ルグランのデザインした下絵に従い、ルネ・キフェールの手によって、青黒二色のモロッコ革を用いた豪華なモザイク装丁(著者名・タイトルは金銀箔押)を施された。この美術装丁については、ルグランがドゥーセの専属として働いたのが一九一九年までとされているから、⁽¹⁹⁾ 遅くとも同時期までには作成されていた可能性が高い。

以上が現存する二種類の自筆原稿の概要だが、実は、仏独二カ国語同時出版の計画を遅滞なく実行に移すために、清書稿からはさらにタイプによる写しが少なくとも二部、おそらくは三部以上作成されていたのである。まず、タイプ稿の存在自体に関しては、ジッドが『詩と散文』誌の主宰者ポール・フォールに宛てた三月一四日付未刊書簡の中に、「私の原稿はすでに全部タイプされているが、校正刷まで持ち越すには及ばぬ訂正箇所をいくつか見付けたので、受け取るのは一八日までお待ち願いたい」という旨の記述があること⁽²⁰⁾ から疑問の余地がない。ちなみにこの記述は、ジッドが、コポーとドゥルーワンに交互に意見を求めながら「修正作業に一週間を費やした」後も、さらに引き続きテキストの仕上げに力を注いだことを示しているが、これについては、あくまで数箇所の語句に限定された小規模な検討作業だったことが同時期の『日記』からも確認できる。⁽²¹⁾ いずれにせよ、タイプ稿の作成は遅くとも三月初頭には完了しており、本格的な修正が一貫してこれを土台に行われたことは、清書稿に施された削除・加筆が局所的かつ少量であること、それとは対照的に、

清書稿と初校〔後述〕との間には作品全体にわたつてはるかに多量の異同が認められることから明らかである。一方、タイプ稿が複数部数存在したことにについては、以下のような段階的推論によつて立証しうる。問題解決の糸口となるのは、ドイツ語訳を委ねられていたペルリンのクルト・ジンガーが同月一七日にジッドに宛てた未刊書簡である。その中で彼は、最初の原稿で下訳を終え、引き続き修正稿を受け取ったところだ、返送した第一稿はこの手紙とほぼ同時にジッドのもとに着くはずである、と報告しているのだ。⁽²²⁾ 翻訳や郵送に要したであろう時間を計算に入れ、関連するいくつかの日付を付き合わせれば、このいずれの原稿も『詩と散文』誌に渡されたタイプ稿と同一物ではありえない。⁽²³⁾ すると当然ながら、ジンガーに送られた第二稿は、やはり同様に修正を加えられたもう一つ別のタイプ稿と考えるのが妥当であろう。残る問題は、翻訳用の暫定的テキストとして使われた第一稿が、現存する清書稿か、あるいは三部目のタイプ稿かという点であるが、二カ国語同時出版のために早期から払われていた細心の配慮、訳者にとつての判読の簡便、自筆原稿の郵送を可能なかぎり避けたジッドの習慣、そしてとりわけ、もはや否定することが困難なタイプ稿の複数性などから、前者であるとは想像し難い。

ところで、ジッド自身はこれらの写しを全く手元に保存しておかなかったのだろうか。作品の生成論的研究にとっても貴重な情報をもたらずに違いない資料は、存在を明らかにされただけで終わってしまうのか。この疑問に答えるためには、およそ二年後に『放蕩鳥

子』の第二版が「オクシダン文庫」から印刷・出版された際に使われたタイプ稿に目を向けるべきであろう。なぜならば、このタイプ稿もまた清書稿をもとに作られたことが確実だからである。つまり、かなり大量の打ち間違い（その一部は明らかにタイプリストの誤読が原因）を含み、注意深い仕事の結果とは言えないが、にもかかわらず、作家自身の綴り字の誤りや数多くの異文など、いたるところで清書稿独自の性格を反映しているのである。「オクシダン文庫」とその母体である雑誌『オクシダン』に父アルベールが深くかかわった機縁で、現在は、その子息フランソワ・シャボン氏が所有するこの資料は、頁付をされた判形二七〇×二一〇ミリの二六枚のタイプ部分（相当数の自筆修正を含む）と、一五〇×二〇〇ミリ大に裁断された野線入紙片（「アルチュール・フォンテーヌに捧ぐ」という献辞だけが記される）および判形二一五×一六八ミリのポレリー社製漉入紙（透かしは同社名のみ）計二葉の自筆加筆部分とからなる。このタイプ稿に関して従来は、実際の作成に当たったのはジッドの初代秘書ピエール・ド・ラニユで、時期も、彼が『狭き門』のタイプを終えて間もない一九〇九年初のことであろうと推測されてきた。しかし、事実は決してその通りだったとは思えない。自筆による加筆・修正の時期や内容については、次節で第二版テキストに触れる際に論ずることにして、ここでは、それとは別の角度から問題を検討してみよう。通説の信憑性にまず疑念を抱かせるのは、ほぼ連続すると想定されている二つの仕事のあいだに認められるマテリアルな差異である。というのは、このタイプ稿と、現在パリ国立図書館に保管されている『狭き

門』のタイプ稿(同図書館整理番号 N. a. f. 25174, ff. 124-278)とを比較対照すれば、用紙が前者では普通紙、後者では漉入上質紙(U. S. LINEN 社製)と異なるばかりか、使用されたタイプライターについても、ともにバイカ型の標準字体ながら、いくつかの文字においては明らかな違いが認められるのである。もっぱら『狭き門』の完成部分を順次タイプさせる目的でジッドがラニユを雇い、同時にタイプライターを購入したのは一九〇七年末のことであって、当時は決して安価でなかったこの種の機器を一年余りの短期間で買い改めたとはいささか考えにくい。また、ラニユは『回想録』(未刊)を残したが、『ジッドの傍らで過ごした年月と』^{ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ}『新フランス評論』の初期(一九〇七—一九一〇)と題されたこの時期に関する章で、かつて『放蕩息子』を読んだときに受けた深い感銘をとりわけ熱を込めて記しているのに、タイプ稿作成には全く言及していない。⁽²⁵⁾ 通説を疑わせるのはこういった傍証的事実ばかりではない。さらに実証性が高く、しかも現存タイプ稿が第二版のためではなく、初版出版に絡んで作られていたものであることをほぼ確実にする裏付けが存在するのである。それは、ある頁の欄外に黒色鉛筆で書かれた《id est: naïf: us: [geburtig (sic)] ursprünglich [e]ch》(「は削除」というノートである。文脈からは意味が必ずしも一義的には決定されない語 naïf に付された、このラテン語およびドイツ語の書き込みは、それが翻訳者の理解を助けるための覚え書と考えなければ説明不可能であろう。そして、まさにこれに呼応するかたちで、ジンガーのドイツ語版は naïf に ursprünglich の訳語を与えていたのである。⁽²⁶⁾ 以上の

諸点から判断して、問題のタイプ稿が一九〇七年の二月下旬ないし三月初に作成された複数部数の写しの一つ、より詳しく言えば、ペルリンに送られた二部のうちのいずれかであることはやや疑えない。自筆修正部分の検討が残されているものの、このように同定されたタイプ稿は、次に述べる新発見の校正刷とともに、清書稿から初版刊行テキストへ至る過程をほぼ完璧に跡付けることを可能にし、さらには、仏独両国語版のあいだに認められる差異〔後述〕の原因についても貴重な情報源となるのである。

続いて校正刷に話を進めると、フランス語版に関しては再校まで取られたことがはっきりしている。数通の未発表書簡が教えるところによれば、初校は、三月一八日にフォールの手に渡ったはずのタイプ修正稿をもとに、ほどなく組み上った。ジッドは、同月二五日にこれをフォンテーヌに送り、彼に作品を献呈したい旨を説明、その了解を求めた後、二九日に返却されると、日を置かず修正を施し、『詩と散文』誌に戻している。⁽²⁷⁾ ところが再校については、五月二四日の『日記』で初めて『放蕩息子』の校正刷を訂正。昼食後ただちに『詩と散文』誌に返しに行く⁽²⁸⁾と記されるように、出来が大幅に遅れ、その結果、予定通りに進行したドイツ語訳の方が数週間早く『ノイエ・ルントシャウ』誌五月号に掲載されてしまうのである。⁽²⁹⁾ ところで、この二種類の校正刷のうち一つがごく最近になって発見されたのである。新資料は、祖母マリア・ヴァン・リセルベルグ旧蔵のジッド関係コレクションを整理中であつたカトリクス・ジッド女史によって見出されたもので、筆者は発見直後に女史から連絡を受け、その

閲覧を許された。薄茶色の鹿皮を用いた装丁（著者名・タイトルともになし）に収まるこの校正刷は、判形二五〇×一六〇ミリのダブルリーフ七葉、計二八頁分かなり、そのうち印刷部分は二六頁である。最初の頁だけは手書きで1と番号を打たれ、以下は6から30までの頁付が印刷されている。ジッドは黒色インクで修正を行っているが、数箇所については鉛筆による下書きの跡が認められる。さて、この校正刷がいつ「小柄な婦人」^{フット・グレイ}マリアの所有に帰したかは不明であるが、我々にとつてはるかに重要な問題、当該資料が初校か、あるいは再校かという問題については、いくつかの根拠から、これが前者であると容易に断言しうる。まず、誤植が依然として一〇ほど未修正のままである点。次いで、自筆修正部分を含めた最終状態が『詩と散文』誌掲載テキストに対して二〇前後の異文を示している点。また、上述の頁組みが雑誌掲載テキストのそれ（5から28までの計二十四頁）と異なる点も無視できない。さらには、この校正刷にはフォンテーヌへの献辞がまだ印刷されていない点である。とりわけこの最後の事実は、献辞の了解を求めるためにジッドがフォンテーヌに初校を送ったことと正確に呼応するものと言えよう。

すでに述べたように、この初校は、作成時期を確定された現存タイプ稿と相補って、フランス語版に関する修正作業の全貌解明を可能にする。まず、初校印刷部分は、誤植を除けば、明らかに『詩と散文』誌に渡されたタイプ稿の最終状態を再現したものであるから、この印刷部分とタイプ稿未修正状態の比較によって、三月上旬から半ばにかけて行われた修正を特定することができる。一方、自筆部

分を含めた初校最終状態は再校印刷部分と基本的には同一のはずだから、これと雑誌掲載テキストのあいだに認められる差異が再校での新たな修正とみなしうるのである。ちなみに、初校印刷部分は現存タイプ稿・雑誌掲載テキストのいずれにも存在しない固有の異文を一つ有するが、この事実からも、現存タイプ稿は『詩と散文』誌に渡ったものではないことが再確認されるだろう。さて、以上を整理するならば、雑誌掲載に至る過程は次のように図式化できる。図中、*印を付した項目は現存資料、またはそれが内包する一段階を、無印は、前後掲の要素の比較対照からその部位が特定可能な修正作業を表す。

- *下書き（部分的草稿が現存）／執筆着手は一月三十一日夜
- ← *清書完全稿（若干数の削除・加筆を含む）／二月二〇日頃に完成
- ← *タイプ稿未修正状態／遅くとも三月初めには作成完了
- ← タイプ稿への修正／三月上旬
- ← *初校未修正状態／三月下旬に出来
- ← *自筆修正を含む初校最終状態（再校印刷部分に相当）／三月末
- ← 再校時の修正／再校出来直後の五月二四日午前中
- ← *『詩と散文』誌三一五月号掲載テキスト／六月初旬に刊行

こうして完成したフランス語版テキストは、『詩と散文』誌三十五月号（通巻第九号）の巻頭を飾った。⁽³⁰⁾ 同じ号には、ステファヌ・マラルメの「フランスにおける詩と音楽」、ギヨーム・アポリネールの「瀆聖」（三年後に『異端教祖株式会社』に収録）、アンドレ・シュアレスの「エレヌ」、アルベール・モッケルの「肉体の悲しみ」、スチュアート・メリル翻訳によるオスカー・ワイルドの「ナイチンゲールと薔薇の花」などが掲載されている。ところで、『放蕩息子』の初版は、書誌学的に厳密を期すれば、この雑誌掲載テキスト（プレオリジナル）の豪華紙別刷を指す。ジッドは、二カ国語同時出版の計画と並んで、早くからこの別刷を考えていたと推測されるが、その部数について従来のジッド書誌はすべて、アルノール・ナヴィルの「ごく少数部数」という曖昧な記述を反復せざるをえなかった。しかし、筆者の調査で判明したかぎりでは、少なくとも五月初旬までは別刷は三〇部と予定されており、その後、再校の予想外の遅滞を利用して、六月に入ってから五〇部に変更された模様である。ただし、この別刷もなかなか出来せず、気を揉むジッドの手に届いたのはようやく同月下旬のことであった。⁽³¹⁾ ちなみに彼は、三〇部の印刷を予定していた時点で入念に贈呈予定者の一覧を作成していたのである。幸運にも筆者が発見することができたこのリストには、ポール・ヴァレリー、シャルル・ルイ・フィリップ、アンリ・ド・レニエ、レオン・ブルム、フェリックス・フェネオン、ウージェーヌ・モンフォール、ポール・デジャルダン、オディロン・ルドン、レーモン・ボヌールをはじめとする、ジッドと親交のあった作家や批評家、画家、作曲家などの

名前が並んでいる。作者が読者として重視していた同時代人の顔ぶれを伝えるという意味でも興味深い一次資料だが、その重要性はむしろ、明らかに意図的な一つの欠落、つまり、作品執筆の動機として作家の念頭を離れることのなかったクロードとジャムの名前の欠落に求められるべきだろう。なぜならば、かなり早くから、ジッドが特にこの二人には作品の完成を報告していたばかりか、彼らのほうでも改宗の新たな可能性を探らんと、出版を心待ちにしている旨を作者に伝え、作品の送付を依頼していたからである。リスト作成の正確な日付については未詳ながら、少なくとも、ジッドの矛盾するこの態度には、作品そのものに置く自負とは裏腹に、二人のカトリック作家の反応に対して抱く消し難い不安と怖れを見ないわけにはいくまい。⁽³²⁾

3 第二版以降の各種刊本／ドイツ語訳初版

およそ一年半後、モンフォールを主幹とする『マルジュ』誌一派との決裂を経て、新生『新フランス評論』誌の創刊を間近にひかえていた一九〇九年一月下旬に、ジッドは、『オクシダン』誌の編集長アドリアン・ミトゥワールに、実売部数に応じて返金される自費出版のかたちで『放蕩息子』の大型贅沢版を出してもらえないかと打診する。彼がこの雑誌社をあてにした主な理由は、同誌を母体とする「オクシダン文庫」からすでに刊行されていたミトゥワールの『健脚家兄弟』やクロードルの『ミューズへの頌歌』の仕上がりの美し

さに魅せられたためだが、同時に、決して最良の関係にあったとはいえない難いそれまでの主要な出版元メルキュール・ド・フランス社を嫌ったという点も見逃せまい。この依頼に、ミトゥワールは即座に応諾し、彼の秘書アルベール・シャボンがジッドとの事務的な交渉に当たっている⁽³⁴⁾。

さて、この出版計画がその後どのように進展したかを知るには、論旨の錯綜化を避けるために前節では触れなかった問題、現存タイプ稿への自筆修正はいづつ、どのように行われたかという問題をここで解決しておかねばなるまい。それは同時に、前節に示した図第8頁下段参照からあらかじめこの自筆部分が除外されていた理由の説明ともなるのである。

現存タイプ稿の修正は、ジッド自身、その妻マドレーヌ⁽³⁵⁾（推定）、シャボン、以上三者の手で行なわれている。まず、黒色インクでシャボンが書き込んだ一五ほどの訂正箇所に関しては、確かな根拠から、ジッドがタイプ稿を『オクシダン』社に渡した後、新たに変更を記載した初版テキストを彼に委ね、それを転写させたものと断定しうる⁽³⁶⁾。いづれも純粹に文体上の小さな修正で、後に第二版固有の異文になったものである。一方、ジッドとマドレーヌがそれぞれ黒色インクまたは鉛筆で行った相当数の削除・加筆については、事情はやや複雑である。両者の書き込みは、そこに一貫した法則を認め難いほどしばしば交互に、あるいは順不同に重なり合うが、一方、修正後の最終状態をとらえれば、初版テキストと大部分において一致しているのである。すると、これらの修正は一九〇七年の時点ですで

に施されていたものとみなすべきなのだろうか。しかし、もしそうであるならば、最初から初版テキストに若干手を加えて出版元に渡すことで事足りたはずではないか。第二版出版にかけたジッドの意気込みと細心の配慮を思えば、この考えはなおさら採り難い。そして実際、現存タイプ稿には第二版独自の異文となった三〇程度の修正（そのいくつかはマドレーヌのものと推定される筆跡）が含まれ、しかも、当該箇所と他の自筆部分のあいだには書体やインクの色に関して目立った違いが全く認められないのである。このことから、問題の修正作業、あるいは少なくともその大部分が一九〇九年に行われたことは疑えまい。ここから翻って、前節で提出した推論の正当性が確認されるばかりか、さらに細かな同定が可能になるだろう。すなわち、三部目のタイプ稿の存在が確実になると同時に、現在タイプ稿が一九〇七年には未修正状態で、ただし⁽³⁷⁾には対する語釈は書き込まれて、ベルリンに送られていた翻訳用第一稿であったことが判明するのである。第二版の出版に際してジッドがこの古いタイプ稿を再利用したのは、かつてコボーやドゥルワンとしたように執筆完了時の状態に立ち戻って、しかし今度は初版テキストを常に参照しながら、そして結果的にはこれをほとんど承認・再録するかたちで、作品の再点検をするためであったと思われる。

こうして修正を終え、三月初には『オクシダン』社に送られたタイプ稿からは校正刷が再校まで取られたが⁽³⁷⁾（初校・再校とも判形三二五×二四五ミリのダブルリーフ一葉〔現在はフランソワ・シャボン氏が所有〕）、この出版のために特別に購入された大型活字の数量不足がお

そらく原因で、作品を二つに分けて組むという方法が採られた。前半部をなす最初の六葉には、初校が六月一七日、再校が七月二八日と、シャルトルのデュラン印刷所によってそれぞれ組み上がりの日付が記入されており、残り五葉の出来についても同様に、九月六日、一〇月五日の押印がある。実質的な校正を必要としたのは初校だけで、シャボンが誤植の一部を訂正した後、ジッドが黒色インクで手を入れてゐる。しかも、この初校とタイプ稿を比較対照すれば容易に分かることだが、ジッド自身の作業も誤植の訂正や印刷上の細かな指示をもつぱらとしており、削除や句読法の変更などいくつかの小さな修正（これらはすべてそのまま刊行テキストに採られた）を除けば、校正刷の段階で新たに加えられた異文は皆無である。⁽³⁸⁾

校了後ジッドは、表紙や本文印刷用の豪華紙を自ら選定するなど、細かな点にまで気を配りながら、年内の出来を心待ちにしていたが、実際の発行は翌一九一〇年一月下旬まで遅れた（ただし刊本の表紙に印刷された年号は一九〇九年のまま）。判形三三×二六センチ、四二頁からなるこの大型本は、限定番号入一〇〇部（定価一二フラン）のほかに、著者献呈用として無番号非売品がおそらく二〇部刷られた模様で、まもなくジッドはこれらを、クロードル、フォンテーヌ、デジャルダン、エミール・ヴェラーレン、アルベール・チボーデ、マルセル・レイ、アンリ・アルベール、エドモンド・ゴス、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールなどの友人・知己に、さらにはシャルル・サロモンを介してはるかヤースナヤ・ポリャーナのトルストイのもとに送っている。⁽⁴⁰⁾ところで、少数限定の贅沢版という物理的

側面のみがしばしば強調され、テキストそのものの重要性が見過されがちだが、この第二版では、タイプ稿修正の結果として、初版テキストの数箇所が削除されていることを忘れてはならない。つまり、第一章末尾の二つの段落にあった「賛美歌のように高まる皆の悦び」、「篝火の煙が空に昇る」、「魂が一つずつ」といった、宗教的な雰囲気を示すいくつかの表現の削除や、寓話のもう一人の主人公とも呼ぶうる「末弟」の登場をあらかじめ告げる文の削除は、単なる文体上の選択という枠を越えて、作品の主題論的な構成においても微妙な影響を及ぼしうるものと言えるのである。これに関連して付言すれば、ジンガーのドイツ語訳に以前から不満を抱いていたライナー・マリア・リルケが自ら『放蕩息子』の翻訳を思い立ち、一九一四年一月には、彼を「依然悩ませていた二、三の文章」についてジッドに直接意見を求めたことはよく知られているが、この会谈の真の目的は、いかに訳すかといった翻訳論議などではなく、明らかに、初版をほぼ忠実に再録した第三版（一九一二年付、翌年発行）と削除箇所のある第二版のいずれを翻訳の底本とするかという、多少なりとも作品解釈にかかわる問題を検討することにあつた。したがって、完成した翻訳そのものの美学的評価はさておき、少なくとも、これらの数節を訳し忘れた、あるいは改竄したとしてリルケの不注意を惜しむ従来の説は否定されねばなるまい。⁽⁴⁵⁾もっとも、第二版テキストを採るべしとするリルケの意見に一度は同意したものの、ジッドが第四版以降の各版でこれを二度と採ることがなかった理由については、判断を下しうる証言が残されていないために不詳とせ

ざるをえないのだが。

すでに言及したように第三版は、句読法などにいくつか小さな差異は認められるものの、全体としては初版テキストの忠実な再録であり、さらには、一部の研究者が同版に対して用いる「決定版」という呼称の可否はともかく、特殊な成立事情をもつ『演劇全集』版を除けば、後の各版も基本的にはすべてこれに依拠している。したがって第三版以後についてはおおむね、テキストそのものの細かな論議は避け、それぞれの出版前後の経緯をごく簡略に述べるにとどめよう。

『新フランス評論』は、雑誌の運営が順調な軌道に乗ると、引き続き、同グループの文学的志向に合致した作品の単行書出版を企画した。他五篇との合本形式による『放蕩息子』第三版の出版はその手初めの一つとして発案されたものである。すでに計画が具体化していた一九一〇年八月には、ジッドは次のような言葉で、収録作品の年代的広がりに対応した自身の変貌を強調しているが、そこには同時に、最近作『放蕩息子』において到達された思想・技量に対する彼の並々ならぬ自負を認めないわけにはいくまい——「私は読者に、この最初の論篇（『ナルシス論』）は一九九二年（^{一九九一}年の誤り）の作であり、第二の論篇（『^{怒の}試み』）は、一八九三年の作であることを注意してもらいたい。私はなにも青年期の作品を否認するものではないが、それが、もっと円熟した年齢に書かれた作品に対するのと同じ眼では見られたくないと思う⁽⁴⁶⁾」。この『日記』の記述を裏付けるように、合本の総題には『放蕩息子』が選ばれ、初期作品二篇のほか『エル・

ハジ』、『ピロクテテス』、『バテシバ』とともに一九一二年二月六日には印刷を終了したが、実際の刊行は翌年二月まで遅れた模様である⁽⁴⁷⁾。初めて大部数で刷られた第三版は、一般読者や職業的批評家にジッドの思想的変遷を改めて印象づけることになったが、彼自身も、礼状や署名入献本の存在によって確認されたかぎりでも、以下の同時代人に直接この版を送っている——クロード・デル、チボーデ、ヴェラーレン、ゴス、シュアレス、モッケル、ロマン・ロラン、フランソワ・ポール・アリベール、ポール・スーデー、アンリ・アルベール、ルネ・ボワレーヴ、アンリ・ダヴレー、ジュール・イエール（筆名ミシエル・イエール）、アンリ・アリエス、マックス・エルスカン、フランツ・ブライ、そしておそらくは、フェルナン・グレーグ、ルイ・シャドウルヌ、ジョヴァンニ・パピーニ、ジョルジュ・ランシーなどに。この合本は、約一〇年後の一九二二年に、全く同じ形式で、しかし無論活字は新規に組み直して、オ・サン・パレリュ出版社から「ボンヌ・コンパニー」叢書の第三巻として限定出版された。

また、このオ・サン・パレリュ版に先立って、二つの異なる版が出版されている。一つは、一九一九年に『新フランス評論』から絵入り単行版として限定出版されたもので、ルイ・ジュウの木版による赤黒二色の挿絵や飾り文字に彩られる。装飾性が大きな位置を占めるこの贅沢版では、同様の目的で各章末の数行が逆三角形を作るように配列されており、その結果、先行各版に見られた当該箇所での改行がすべて省略されている点が注目に値しよう。もう一方の版は、一九二一年末にやはり『新フランス評論』から出版された『選

文集』の中に収録されたものである。この小型本(判形一四・五×九・五センチ)は、ジッドの数多い既刊作品をほとんどすべて網羅しつつ、未発表断片もいくつか盛り込んだもので、必然的に断章形式をとらざるをえなかったが、『放蕩息子』に関しては、比較的短い作品であるとはいえ、全文収録という特権が与えられている。ジッドは数度にわたって入念な校正を行い、ときに「表現の執拗さ、単調さ、繰り返し(49)の多さ」を感じることがあっても、この『選文集』に「きわめて重要な位置(50)」を与える点では常に一貫していた。一例を挙げれば、出版直後の一二月一九日にはリルケに献呈本を送り、「昔のテクストの重ね合わせが格別の雄弁さを発揮していると思う」と書き添えている。⁽⁵¹⁾

『新フランス評論』は一九三二年に『ジッド全集』の予約出版を開始したが、『放蕩息子』は、翌年一〇月一八日に印刷を終了した第五巻に収められた。当時の『日記』は、ジッドが、ルイ・マルタン・ショフィエやアンドレ・マルローらの協力のもとに、タイプ稿や校正刷で収録作品を見直したという記述を数度にわたって残している。にもかかわらず、この『全集』についてはその不備がしばしば指摘されるのである。その理由は、第二次大戦勃発によって一九三九年刊の第一五巻で中断し、計画が未完に終わったためばかりではない。まず、配本開始当初から収録漏れが少なくなかったことが挙げられよう。たとえば、ジッドから最初の二巻を送られたデジャルダンとは早々と、『全集』と銘打つことを許さぬ要素を具体的に列挙し、穏やかながらも核心に触れる批判を作者に書き送っている。⁽⁵²⁾さらに重要

なのは、各テクストが必ずしも質的に信頼性の高いものとは思われない点である。『放蕩息子』についても事情は同様で、誤植による冠詞の不整合をはじめ、提示されたテクストは精密な作業の結果とは認め難い。ただ、このように信頼性に欠ける点があるとはいえ、『演劇全集』版を別にすれば、作家自身が確かに校閲したと実証しうる最後の版という位置はやはり軽視されるべきではあるまい。実際、『田園交響楽』(初版は一九一九年。以後、現在までに三〇近い版が存在)の見事な批評校訂版を作成したクロード・マルタンは、まさに同じ理由から、この『全集』版を底本に掲げているのである。⁽⁵³⁾

これとは逆に、一九三〇年から翌々年にかけてドイツで相次いで出版された四つの語学教科書版『放蕩息子』については、確かな根拠から、ジッドはいずれのテクストも校閲しなかったことがはっきりしている。⁽⁵⁴⁾ただ、同一作品に対する複数の教科書版の出現というこの現象が決して偶然などではなく、ドイツ国内でのジッド熱の高まりを反映したものであることは付け加えておくべきだろう。たとえば、『放蕩息子』を舞台にかけた演出家マルセル・エランは一九三三年のバリ初演の際に、アンリ・フィリップソンのインタヴィューに答えて次のような証言を残している——「これは外国では大変よく知られた作品で、とりわけスウェーデンやドイツではしばしば演じられています。それがドイツのあらゆる学校でフランスの古典として教えられていることをあなたはご存じないでしょう」。⁽⁵⁵⁾また、活字を組み直し、一九二一年版とは異なる判形でガリマール書店から出た『選文集』の第二版(一九四二年)についても、上記教科書版と同

様に、ジッドが直接には関与しなかったことが分かっている。

前段で述べたような三〇年代前半におけるドイツ国内でのジッド熱の高まりは、実は、一九一四年に出版された『放蕩息子』のリラケ訳によって準備されていたと言っても過言ではない。それ以前にもジッドの作品はいくつかドイツ語に翻訳されていたが、作家の名を広く一般読者に知らしめたのはこのリラケ訳『放蕩息子』であり、ヒトラー政権が排外的政策を強硬に遂行し始めるまでは、しばしばボーイスカウトによる野外上演が行われるほどであった。とはいえ、同作はもとも舞台上演を前提に書かれたものではなく、ジッド自身も演劇の実践に対しては長年にわたりある種の警戒心を抱いていた。そのような事情もあって、『放蕩息子』が演劇作品として初めて改作されたのは、ようやく作家の最晩年になってのことである。イド・エ・カランド社版『演劇全集』全八巻の刊行にかけたジッドの意気込みについて、同社の社長であり、作家の友人でもあったリシャール・エイは後に次のように語っている——「各作品は執筆年代に従って順次ジッドの見直しを受けた。彼がほんの少ししか修正を施さないものもあれば、大幅に手直しするものもあった。この仕事は数カ月に及んだ。というのは、劇作家アンドレ・ジッドはこの機会をとらえて、自身の演劇作品の決定版を作ろうとしていたからである」⁽³⁶⁾。こうした経緯を経て、第三巻（一九四七年）に収録された『放蕩息子』は、「読書のためのテキスト」という基本的性格は維持しながらも、演劇版としての変更をいくつか含んでいる。その主要なものとしては、各章の小題が削除され、代わって作品冒頭に登場人物の一覧が

掲げられたこと、象徴的な意味を担う「父」や「家」の語が他の版よりも頻繁に Pere, Maison と大文字で始められていること（作品全体で大文字と小文字が意識的に使い分けられていたことを思えば、この変更の意味は軽視できない）、そしてとりわけ、序言において、「読者」が「観客」に代わるのにもない、語りの構造上微妙な役割を果たしていた話者の「私」が「朗読者」の役で登場すること、また、物語の本体では話者の介入部分がほとんどすべてイタリック体の卜書きに代わることなどが挙げられよう。⁽³⁷⁾ なお、各章の冒頭をモリス・ブリアンションの石版画が飾る。

翌一九四八年には、二つの版がともにガリマール書店から出版されている。一つは、六つの「論篇」を集めた合本の新版（この形式では三番目のもの）で、同年三月の発行である。『放蕩息子』に関しては、それ以前に存在していた誤植の訂正のほかに、細部の相違が二、三認められる。関連証言が一切残されていないため、これらがジッド自身の手によるものか否かは不詳であるが、真の異文であるという可能性を否定し去ることも同時にできない。もう一方は、大部な二冊組挿絵入選集『物語、小説、茶番劇』の第一巻（九月三〇日印刷終了）に、ジャン・ユゴーの水彩画二葉とともに収められたものであるが、この選集については確実な根拠から、ジッドはまったく校閲を行っていないことが判明している。⁽³⁸⁾

以上で、ジッドの存命中に出版されたすべてのフランス語原文版についての略述を終えた。二〇近い各種刊本のいずれを底本に選ぶかはさておき（というのは、底本の選択に個人的な見解ないし趣味が混

じらぬことはむしろ稀であるから、批評校訂版の作成に際しては、少なくとも作家が校閲した可能性を否定できないものについては、異文考証の対象からはずすことは許されまい。これまでの論述と重複するが、備忘として以下にそれらの一覧を掲げる。ちなみに、ジッドの没後も今日に至るまで、ブレイアッド版『作品集』(一九五八年)収録のものも含め、筆者が知るかぎりでも六種の刊本が存在するが、いずれも生前のジッドの意志を反映したものではないことが分かっている⁽⁶⁹⁾ので、これらは必然的に我々の対象からは除外される。

- 一 『詩と散文』誌一九〇七年三月五月号掲載テキスト、およびその別刷によって構成される初版(非売品)。
- 二 「オクシダン文庫」版、一九〇九年付(二〇〇一年一月発行)、初めての商業版。「アヴァン・テクスト」として、自筆修正タイプ稿、および二種類の校正刷(自筆修正は初校のみ)。
- 三 一九一二年版(一三年二月発行)、新フランス評論出版社、合本版第一版。
- 四 一九一九年版、新フランス評論出版社、絵入豪華版。
- 五 『選文集』第一版、新フランス評論出版社、一九二二年。
- 六 一九二二年版、オ・サン・パレイユ出版社、合本版第二版。
- 七 『全集』版(第五巻)、新フランス評論出版社、一九三三年。
- 八 『演劇全集』版(第三巻)、イド・エ・カランド出版社、一九四七年。
- 九 一九四八年版、ガリマール書店、合本版第三版。

さて、前節では、ジンガーによるドイツ語訳とフランス語版初版テキストのあいだに、若干数だが明白な相違が認められるという事実を指摘するにとどめていた。本稿を終えるにあたり、校訂版作成における現存タイプ稿の取り扱い方を絡めて、この問題に言及しておきたい。

同時出版が期されていたにもかかわらずフランス語版初版よりも早く雑誌掲載されたこのドイツ語版は、計画がジッド本人の発案によるためだけではなく、修正タイプ稿にもとづいて作成された訳文が校正刷段階でまず疑いなく作者の校閲を受けた点⁽⁶⁹⁾で、フランス語版に劣らぬ資料的価値を主張しうる。事実、校正刷そのものは今日まで未発見であるが、刊行テキストをフランス語版およびその初校と比較すれば、ジッドの行った修正が仏独両版で必ずしも同一ではなかったことが判明するのである。たしかに、翻訳という行為は一般的に、句読法、書記法、語彙、統辞法といったさまざまな言語レベルの変更を前提にせざるをえないために、原語テキストと翻訳の底本となったテキストの一致や相違を識別することは容易ではない。しかし、そのような困難にもかかわらず、少なくともドイツ語訳の対応箇所がタイプ稿未修正状態と明示的な類似を見せる場合には、前者を後者の忠実な翻訳とみなして差し支えあるまい。以下にその例を二つ掲げるが、各異文の配列は時間的順序に従い、自筆稿(略号 Ms)、タイプ稿(Dachyl)、ドイツ語訳(Trad. Singer)、フランス語版の初校および刊行テキスト(Epr, EdO)とし、第二例のよう

に、タイプ稿に一九〇九年と推定される自筆修正がある場合はこれを最後に置く（「」は削除、〈〉は加筆）。

Ms: Mais ce soir cette pensée / *Dactyl*: Mais cette pensée / *Trad. Singer*: Aber der Gedanke / *Epr*: Mais cette pensée <à présent> / *Ed.O*: Mais cette pensée à présent

Ms: la lampe... / *Trad. Singer*: die Lampe... / *Epr*: la lampe... <— Ah! donne-moi la main jusqu'à la porte.> / *Ed.O*: la lampe... — Ah! donne-moi la main jusqu'à la porte. / *Dactyl*: la lampe.[...] <Ah! donne-moi du moins la main jusqu'à la porte.>

第一例においては、自筆稿にあった *ce soir* が、おそらくタイプビストの不注意によって脱落し、そのままドイツ語版の異文となったが、フランス語版では、これに代って *à présent* が校正段階で加筆されたことが分かる。同様に第二例からは、タイプ稿未修正状態のままにドイツ語訳されたのに対し、フランス語版では、校正刷で新たな一文が加えられたこと、かつ、これとは若干異なるものが、第二版の準備段階でも加筆されたことが了解されよう。ところで、このような例とは逆に、ドイツ語版にはごく少数ながら、第二版固有の異文となったタイプ稿最終状態とすでに一致している箇所があること

を隠すべきではあるまい。その一例——

Ms, *Epr*, *Ed.O*: quel déboire était / *Trad. Singer*: der Müdigkeit / *Dactyl*: quel<e> [déboire] <fatigue> [état]

しかしながら、反対例が質量ともに圧倒的なことから、現存タイプ稿が翻訳用第一稿であった、そして、自筆修正は基本的には一九〇九年のものである、という我々の主張に変わりはない。また、上記の僅少例についても、すでに一九〇七年時点で翻訳用第二稿あるいはドイツ語版校正刷に施されていた修正であり、フランス語版第二版において再び採択されたもの、と推測してもさほど大胆なこととは思われない。

註

(1) 現在も重要な参照対象たりうる単行書としては、特に以下のものを挙げる。Germaine Bréte, *André Gide l'insaisissable Protée*, Paris: Les Belles Lettres, 1953; Pierre Lafille, *André Gide romancier*, Paris: Hachette, 1954; George I. Brachfeld, *André Gide and the Communist Temptation*, Genève: Droz, et Paris: Minard, 1959; Vinio Rossi, *André Gide. The Evolution of an Aesthetic*, New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1967; William Wolfgang Holdheim, *Theory and Practice of the Novel. A Study on André Gide*, Genève: Droz, 1968.

(2) ただし、この点に関しては、ジャン・ユンベールの記念碑的大著『ミッドの青春』(Jean Delavay, *La Jeunesse d'André Gide*, Paris: Gallimard, 2 vol. [1956-57]) の存在を忘れないで読みたい。

- (3) Voir Claude MARTIN, «État présent des études gidienues (1951-1963)», *Critique*, n° 206, juillet 1964, pp. 598-625; «Toujours vivant, toujours secret...», *Études littéraires*, vol. II, n° 3, décembre 1969, pp. 283-308; «Les études gidienues en 1975 - et après?», *André Gide* 6, Paris: Lettres Modernes Minard, 1979, pp. 269-282.
- (4) Voir *La Correspondance générale d'André Gide, répertoire, préface, chronologie, index et notices*, Lyon: Centre d'études Gidiennes, Fasc. I-VI [1984-85]. 第七分冊「補遺」のみが未刊。
- (5) 断片的な草稿研究を除くは、これまでに刊行されたものは次の四点である。『田園交響楽』(*La Symphonie pastorale*, édition critique établie et présentée par Claude MARTIN, Paris: Lettres Modernes Minard, 1970)『トナリヤミナ／＼／＼／＼／＼』(*Prosephone / Perséphone*, par Patrick POLLARD, Lyon: Centre d'études Gidiennes, 1977)『トナリヤミナ・トナリヤミナの手記』(*Les Cahiers et les Poésies d'André Walter*, par Claude MARTIN, Paris: Gallimard, coll. «Poésies», 1986)など。批評校訂版は、なな「一粒の麦もし死なずば」に関する次の研究書は、同作全体とわたって自筆原稿の異文を要約しつゝ C. D. E. TOLTON, *André Gide and the Art of Autobiography: A Study of «Si le grain ne meurt»*, Toronto: MacMillan of Canada, 1975, pp. 96-112. また筆者の知るかぎり、現在ある程度まで準備が進んでゐるものとしては以下の通り(括弧内は担当著者)——「サニール」(ジャン・クロード)『「背徳者」(デヴィッド・キイバウワー)』『「イザベル」(ジョエル・マッソン)』『「法王庁の抜け穴」(アラン・グーレ)』『「女の学校」三部作(アンドリュウ・オリヴァー)』『「コンゴ旅行記」(タニエル・デロゼー)』『「日記」(エリック・マルティ、クロード・クルーヴ)』種々の批評作品(クロード・マルタン)。
- (6) 拙論「ジッドの『放蕩息子の帰宅』——状況に想をえた小品」——(一)『(二)』(三)『「流域」』青山社、第二五号(一九八八年一月、三九一—五四頁)、『第二六号(一九八九年四月、三七—四五頁)』第二七号(同九月刊行予定)を参照されたい。
- (7) 『日記』(*Journal 1889-1939*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque

de la Pléiade», 1948)『一四四頁。

- (8) 『日記』一四四頁。
- (9) 「クロード」と「ジャック」が私にして欲しいと願つてゐる行為がまた「反」にするとして「なぜそれは」(私の)放蕩息子が「家」に帰るには帰るが、弟の家出に手を貸すために帰るといふような仕方ではありえないのかといふこと、この二つを骨の髄まで承知してゐながら、私はこの「状況に想をえた」小品を書いたのだから、そこに私の心情のすべてを、そして同時に私の個性のすべてを注ぎ込んだ。』(André GIDE, «Lettres à Beck», *Mercure de France*, n° d'août 1949, p. 621)。
- (10) 『日記』一四四頁。
- (11) Francis JAMMES - André GIDE, *Correspondance (1897-1944)*, Paris: Gallimard, 1948, p. 238.
- (12) Catharine H. SAVAGE, *André Gide. L'Évolution de sa pensée religieuse*, Paris: Nizet, 1962, p. 119.
- (13) Pierre de BOISSEFFRE, *Vie d'André Gide*, Paris: Hachette, tome I [seul paru, 1970], p. 475.
- (14) Voir Claude MARTIN, *La Matérialité d'André Gide*, Paris: Klincksieck, tome I [seul paru, 1977], p. 617. ただし「トナリヤミナ」の書誌は、各自筆原稿の判形・枚数などに関する簡略な記述を与えるにとどまり、その内容そのものには一切触れてゐない。
- (15) 現在研究者の間でも広く流布してゐる「レイアッド版『作品集』」(*Romans, récits et solies, œuvres lyriques*, 1958)によつて対応箇所を示せば、母の台詞「Pensais-tu donc être heureux loin de nous?」(p. 484)から放蕩息子のそれ「Ah! le porcher!」(p. 486)まで。
- (16) 『日記』二二九頁。
- (17) 頁付は、タイトルページが1、小紙片が1 bis、以下25までで、末尾に「番号を打たれてゐない白紙一葉が添えられてゐる。ドルモワは、一九二五年からドゥーゼの膨大なコレクションの分類整理を任されてゐたが(voir Marie DORMOY, *Souvenirs et portraits d'amis*, Paris: Mercure de France, 1963)『放蕩息子の自筆完全稿については、最初「上記とは別の頁付を各紙片の左上端に行つてゐた。また、使用されたボレーリ社製漉入上質紙について

は、すでにバトリック・ポラードが関連情報をつくか報告しているが (voir l'édition critique de *Proserpine / Perséphone*, établie et présentée par Patrick POLLARD, op. cit. pp. 49-50) 当該完全稿は装丁に収まるため、その各紙片がシングルリーフか、あるいはダブルリーフの片面かを識別するのは容易ではない。しかしながら、微妙な判形の相違、透かしの種類(「ボレーリ」か、牡鹿の絵か)、紙片の使用法(上下、表裏)などによって、大半はシングルリーフであると推定しうる(ちなみに、この豪華紙のダブルリーフ判を表から見れば、左面に社名の透かしが入り、右面には牡鹿が頭を左に向けて立つ)。

(18) 自筆完全稿には、一九一七年五月一日付のジッドの書簡が添付されているが(ドゥーセ文庫、γ 1166-1 B-V-24、未刊)、その中でジッドは、「放蕩息子」のほか、「サニール」、「文学における影響について」の自筆原稿の譲渡に関する交渉を行っている。封筒が保存されておらず、書簡自体にも名宛人を明示する記述はないが、その内容から判断すれば、交渉相手はドゥーセ本人ではなく、彼の蒐集に協力したブロック(一八六五—一九四九)であることはまず疑えない。ちなみに、オースチン・テキサス州立大学のハリー・ランサム人文科学研究所には、同時期の一九一七—二〇年にジッドが「書物探索の依頼と、彼自身の自筆原稿および初版本の譲渡」のためにブロックに宛てた一二通の書簡が保管されている(voir le catalogue de l'exposition *Bandelaire to Beckett, A Century of French Art and Literature*, 1976, item n° 209)。

なお、上述の「サニール」、「文学における影響につづつ」の自筆原稿は、いずれも、現在ドゥーセ文庫の所蔵となっており(γ 1148 B-V-16、および γ 1097 B-VI-10)、交渉の結果、計三点が同時に購入されたことを推測させる。

(19) Voir François CHAPON, *Mystère et Splendeur de Jacques Doucet (1853-1929)*, Paris: Jean-Claude Lattes, 1984, p. 259. また、この美術装丁の詳細については、次の資料を参照: Pierre Legrain relieur, *Répertoire descriptif et bibliographique de mille deux cent trente-six reliures*, Paris: Librairie Auguste Blaisot, 1965, item n° 383.

(20) この書簡(個人蔵)は、封筒が保存されておらず、日付も「木曜日」としか記されていないが、フォールの三月二日付書簡(ドゥーセ文庫、γ 519-17、未刊)への返信であることや、その後の経緯から、同月二四日「木曜日」のものであることは明らかである。付言すれば、引用文中の「一八日」も原文では「月曜日」とのみ記される。

(21) 「日記」、二四〇—二四一頁参照。

(22) ジッド宛一九〇七年三月二七日付書簡(原文ドイツ語)、ドゥーセ文庫、γ 429-2 参照。「ノイエ・レントシャウ」誌の編集長オスカー・ビーは、ジッドに宛てた手紙(ドゥーセ文庫、γ 350-2、未刊)で、「放蕩息子」の翻訳者候補として、すでに「カンドール王」のドイツ語訳で知られるフランツ・プライの名前を挙げていたが、結局は、同誌で働いていた青年ジンガー(一八八六—一九六二)が選ばれた。この変更の理由については推測の域を出ないが、当時ジッドがプライの翻訳をたびたび酷評していることから、少なくとも後者は作者自身の要請によって退けられたものと思われる。一方、ジンガーについては、ジッドはその才能を評価したようで、一九一〇年には、ポール・デジャルダンが主宰する第一回「ボンティニーの旬日懇話会」に彼を招待し(ジンガーのジッド宛同年六月五日付未刊書簡、ドゥーセ文庫、γ 260-1を参照)、さらに翌年には、「新フランス評論」誌三月号に論文「ドイツ語の擁護」を掲載させている。なお、筆者の求めに応じて、ゲオルク・ベーター・ラントマン氏がジンガー文庫(スイス、バーゼル)を調査したが、ジッドが「放蕩息子」ドイツ語版についてジンガーに書いたはずの手紙をはじめ、関係資料は一切発見されなかった。同氏によれば、ジンガーは三〇年代に日本に滞在したが、大戦勃発時に慌たたく離日、その際彼が所有していた多くの文献資料が消失したという。

(23) まず、「詩と散文」誌用の原稿は一八日までジッドの手元に置かれたはずだから、これが、一七日の手紙でジンガーが受け取ったと報告している翻訳用第二稿とは別物であることは説明を要すまい。また、翻訳第一稿についても、ジンガーの手紙とはほぼ同時にベルリンから発送されたのだから、ジッドがフォールに連絡を取った一四日より前にパリに到着していたとはとうてい考えられない。

(24) ラニユによる「狭き門」のタイプ稿作成は、作品執筆の進展に応じて進められ、一九〇八年一月頃まで続いた(執筆自体は一〇月二五日に終了)「日記」(二七〇頁参照)。たとえば一〇月二日には、ジッドは出来上がった断章を彼に委ねながら、次のように書き送っている——「これが『狭き門』の最終部ではない(まだおよそ五〇枚ほど欠けている。つまり、アリサの日記、ジュリエット宅訪問が)」(Catalogue de l'exposition *André Gide*, Paris: Bibliothèque Nationale, 1970, p. 110, n° 372)。ちなみに、ラニユは、幼年期のジッドのピアノ教師で、「賈金つかい」(一九二五年付、翌年発行)の登場人物ラ・

ペルーズ老人のモデルになったマルク・ド・ラ・ニユの孫。

(25) 当該箇所資料提供はクロード・マルタン氏による。

(26) 問題の語 *naïf* は、兄が発する次の言葉の中で使われているが、大別すれば、「自然の、本来の」(ジッドはこの意味で使用)、「無知な、愚鈍な」という二通りの解釈が可能だろう：「[...] De quel chaos l'homme est sorti, tu l'ap prendras si tu ne le sais pas encore. Il en est sorti ; de tout son poids *naïf* il y retombe dès que l'Esprit ne le soutève plus au-dessus [...]」(プ レイアッド版『作品集』、四八二頁、強調引用者)。なお、本文次節で述べるように、ジッドは一九一四年に、『放蕩息子』をドイツ語に翻訳していたリルケと会い、その疑問に答えているが、タイプ稿への語釈の記入はこの会談とは全く関係がないと断言しうる。その根拠は、まず、今日の所在から判断して、タイプ稿が第二版の出版に使用された後もジッドには返却されず、シャボンの手元に残ったことが確実視される点。加えて、リルケが疑問とした箇所は、語釈を含む部分とは明らかに別物であり、実際に刊行された翻訳テクストに関しても、ジッドの狙いとは逆に、品詞を変えながらも *naïf* を *Enfant* と訳している点である。

(27) ジッドのフォンテーヌ宛三月二五日付書簡(個人蔵)、同二八日付のフォンテーヌの返信(ドゥーセ文庫、p. 517n)などによる。

(28) 『日記』、二四七頁。

(29) フランス語版の発行は少なくとも六月初旬まで遅れたことが、以下の二つの証言から明らかである。つまり、ジッドのアンドル・リュイテルス宛六月一日付未刊書簡(ドゥーセ文庫、p. 148-158)によれば、この時点では『詩と散文』誌三—五月号はまだ出ていないのに対し、同誌の熱心な定期購読者であったジャック・リヴィエールは、同月一三日にボルドーでその配送を受けている(voir Jacques RIVIÈRE - ALAIN-FOURNIER, *Correspondance* (1905-1914) [nouvelle éd. revue et augmentée], Paris : Gallimard, tome II [1966], p. 36)。

(30) フォールは、すでに前年の暮に、『詩と散文』誌の巻頭を飾る作品の執筆をジッドに要請していた(ジッド宛一九〇六年二月六日付未刊書簡、ドゥーセ文庫、p. 519-13 参照)。これに対しジッドは、『バルベール・ドールヴィイとフローベル』に関する論文を自ら提案したが(フォール宛同月八日付未刊書簡、オテル・デ・ベルグ競売カタログ「ジュネーヴ、一九八四年六月九日」参照)。

彼の執筆不能状態が依然続いたため、計画は進展せず、結果的にはモーリス・バレスの小篇『Chez nos morts』にその役を譲っていた。同雑誌の次号に『放蕩息子』が掲載されるにあたり、これが巻頭に配されたのは、以上のような経緯と無関係であったとは思えない。

(31) Arnold NAVILLE, *Bibliographie des Ecrits de André Gide*, Paris : Chez H. Montarasso, 1949, p. 45.

(32) ジッドがアンドル・リュイテルスに宛てた一九〇七年六月一日付前掲書簡、同じく二三日付書簡(ドゥーセ文庫、p. 148-159、未刊)、リュイテルスの二七日付返信(同、p. 528-152、未刊)などの情報による。

(33) リストに関連した詳細については、前掲拙論「ジッドの『放蕩息子の帰宅』」状況に想をえた小品「(一)」四九—五一頁を参照されたい。なお、初版を構成する推定五〇部の別刷のうち、今日までに七部の署名入献本の現存が確認されている(voir *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 82-83, avril-juillet 1989, p. 293)。

(34) 本段落の情報は、主として以下の未刊文献による。ジッドのミトゥワール宛一九〇九年一月二二日付書簡(ドゥーセ文庫、Ms 1838 a)、「ミトゥワールの二四日付返信(同、p. 696-4)」、ジッドのシャボン宛二月二八日付書簡(フランソワ・シャボン氏個人蔵)。なお、以下の註で言及するジッドならびにラニユのアルベール・シャボン宛未刊書簡はすべて同氏の所有。

(35) たとえば、一九七〇年にブリュッセルで開催されたジッド展のカタログ作成者は、タイプ稿を作ったのがラニユであるという通説にひきずられたため、この筆跡を彼のものと記述しつつ(voir *Présence d'André Gide*, catalogue rédigé par Jean WARMOES, Bruxelles : Bibliothèque Royale Albert 1^{er}, 1970, p. 68, n° 192)筆者自身も、ある時期までの記述に依拠しつつ(拙論「Quelques remarques sur la traduction rilkéenne du *Retour de l'Enfant prodigue*, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 64, octobre 1984, p. 624, note 15 参照)その後タイプ稿を実際に関与することによって「問題の筆跡がラニユのものではないこと、また一九〇七年の修正作業を手伝ったコポーやドゥルワンのものでないことを確認した。筆者の知るかぎりでは、マドレーヌの筆跡である可能性が大きい。ここではあくまでも推定にとどめる。

(36) フランソワ・シャボン氏の証言によれば、かつてアルベール・シャボンは、

『放蕩息子』が掲載された『詩と散文』誌を一冊所有しており、そこにはジッ
ドの小さな自筆修正が若干数施されていたという。この資料は兩次大戦間に所
在が分からなくなったが、タイプ稿のシャボンによる訂正箇所には書き直しが
なく、またジッド自身の書き込みも全くないことから見ても、それが新たな変
更の一覧として送られたものであることは疑えない。何よりも、編集者が作家
のテキストに無断で手を入れたとは想像できない。

(37) 初校については、タイプ稿の第一頁右端にシャボンの手で、印刷所への
指示が次のように書かれている——「二四ポイント・イタリック体で組むこと
判形四折。校正刷三組要」(前掲カタログ *Presence d'André Gide, item n°*
192に紹介済)。

(38) ミトゥワールの一月二四日付初掲書簡、ジッドの六月二五日付シャボン宛
未刊書簡などにもとづく推定。

(39) フランソワ・シャボン氏の個人コレクションには、初校が二組(うち一組
はほとんど未修正で、アルベール・シャボンの手で「写し」と書かれる)と、
植字上の指示を一つだけ含む再校の「写し」一組が保存されている。後者と刊
行テキストを子細に比較すれば、再校への修正作業は、植字ないし句読法に関
する数箇所の変更に限られたことが判明する。なおジッドは、少なくとも作品
前半部の再校に関しては、修正をラニユに委ねた模様(ラニユ宛八月一六日付
未刊書簡、ドゥーセ文庫、Ms 5-171 & 参照)。また、初校に誤植が多いこと
やジッドが行った作業の内容については、その後半部冒頭にシャボンが書き込
んだ印刷所宛のメモからも窺えよう——「この校正刷は大変悪い。しかし、作
者の修正はなし。できるだけ早く再校を私に送られたし」。

(40) この遅滞についてジッドは、フランソワ・ポール・アリベール宛一月二〇
日付書簡で、「放蕩息子」は六週間前から印刷を終了し、準備が整っているの
に、私はそれを未だ手にすることができない」(*Correspondance avec François-
Paul Albert, Lyon: PUL, 1982, p. 30*)と嘆き、翌日には「シャボンに對し
て強い不満を伝えるが、第二版が出来した直後の二四日には、その仕上がりに
大きな満足を表明する礼状を送っている」。

(41) ジッドは、一九〇九年一月二五日付のシャボン宛未刊書簡で、同部数の
増刷を申し入れていた。いずれにせよ、無番号非売品が存在したこと、また、
ジッドがそれを献呈用に用いたことに関しては、一九一〇年二月二日と推定
される、ラニユのシャボン宛未刊書簡の記述内容や、筆者が実際に確認した数

部の署名入献本によって明らかである。

(42) サロモン(一八五九—一九三六)が、ジッドの依頼に応じて、「放蕩息子」
第二版をトルストイに届けたのは、この文豪の生地出奔・死去の四カ月前にあ
たる七月二三日(旧暦七月一日)のことである。トルストイは、作品の朗読
を聴きながら、その福音書解釈に対する憤慨を隠さなかった。この朗読の様
状については、一九一二年にサロモンから話を聞いたロマン・ロランが簡略な記
述を残しているが(邦訳「ロマン・ロラン全集」、みすず書房、第三七巻九〇
頁および第三九巻三八—三八九頁参照)、サロモン自身によるさらに詳しい
報告としては、彼が朗読の翌日ジッドに宛てた未刊書簡(ドゥーセ文庫、*Ms 782-1*)
と、後年「トルストイ」記念全集」の編集者の質問に答えた手紙(J. H.
TOULSTOÏ, *Il n'est pas possible de commencer [1928-59], tome LVIII, p. 45,*
note 391)がある。いずれもジッド研究者によって一度も指摘されることがな
い資料であるが、ここでは後者を訳出しておく。ちなみに、編集者(おそらく、
当該巻担当のロジオーノフ)は、この手紙を一九一〇年四月三日付とする
が、明らかな誤り。一九二〇年ないし一九三〇年の同月同日の誤植か。

「トルストイのすめに従って、私は広間の円卓に向い、ジッドの短篇を通
して朗読しました……。私は、トルストイが作品を非難しているなとすぐに感
じました。「なぜだ」「どうしてなのだ」と言葉をはさんで、私の朗読をさえ
ぎったからです。明らかに彼は憤慨していました。「ジッドは」どうしてこん
な寓話をこつつけるのだらう。ともかく本は私に置いていってください」。そ
う言って彼は本を持ち去りました。翌朝、彼は本を持ってきて、「あなたの友
人の短篇を昨晚読み返してみましたが、本当につまらないものですね」と言
いました。私の記憶では、作品に対するトルストイの感想を知りたいというジッ
ドの求めに応じて、その日のうちに彼に手紙を書きました」(原文ロシア語)。

(43) 該当箇所は「ブレイアッド版『作品集』」四七七頁。

(44) André GIDE - Rainer Maria Rilke, *Correspondance (1909-1926)*,
Paris: Corréa, 1952, pp. 84-92.

(45) たとえば、両作家の相互翻訳について論じたルネ・ランクは、少数限定
版という理由だけで第二版をあらかじめ検討の対象から外し、異文の照合を全
く行っていない(voir René LANG, «Rilke and Gide: Their Reciprocal
Translations», *Yale French Studies*, vol. VII, 1951, n° special André
Gide, p. 102)。なお「詳細な論証に関し」は「前掲拙論『Quelques remarques

sur la traduction rikéenne du *Retour de l'Enfant prodigue* 六二一—六二五頁を参照されたい。

(46) 『日記』三〇八頁。判注引用者。

(47) ジッドは、一九一三年一月三〇日に、文通相手のアリヘールが「数日後には」この第三版を受け取るだろうと書いている（前掲ジッド・アリヘール往復書簡集、八三頁）。雑誌や新聞への献本も二月中に行われたらしく、たとえば、週刊誌『オビニオン』は三月一日号に受領報告を掲載している。

(48) 第三版までの批評界の反応については、拙論『Essai de Bibliographie du *Retour de l'Enfant prodigue* d'André Gide』北海道大学「言語文化部紀要」第一五号、一九八八年「一九八九年一月発行」一一八一—一三〇頁を参照されたい。

(49) 『日記』六九八頁。

(50) Maria VAN RYSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite Dame*, Paris: Gallimard, tome I [1973], p. 78.

(51) 前掲ジッド・リルケ往復書簡集、一七四頁。

(52) ジッド宛一九三三年一月二二日付未刊書簡（「シュレーマ文庫」γ 477-16）に於て。

(53) Voir l'édition critique de *La Symphonie pastorale*, établie et présentée par Claude MARTIN, op. cit., pp. CLII-CLIII.

(54) 教科書編者の一人であるクルト・フォスが一九三一年三月六日にジッドに宛てた未刊書簡（カトリーム・ジッド女史個人蔵）などによる。

(55) 『アントラン・ジション』紙、一九三三年一月二二日。

(56) Richard HEYD, «André Gide dramaturge», *Revue de Belles Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, nov.-déc. 1952 [parution mars 1953], pp. 10-11.

(57) 実際は名付けられていないために、ここでは便宜的に「序言」という呼び方を用いたが、作品冒頭に置かれた話者の前口上は、メザニール・オナルが提案した区分（voir Martine MAISANT-LÉONARD, *André Gide ou l'ironie de l'écriture*, Les Presses de l'Université de Montréal, 1976, p. 33）に従って、Préface と「ひびく」preamble と二つの機能するものである。すなわち『背徳者』（一九〇二年）などのはっきりそれと名付けられた Préface が現実の作者（あるいは「少なくとも」著者の「私」）への照会によって成立し、フィクションそのものには全く登場しない存在）によって提示されているのに対して、

『放蕩息子』の「序言」は、しばしば寓話の進行に介入する話者が提示するところで、フィクションに合体し、その構造化に参画しているのである。事実、その印刷に関しても、イタリック体で印刷されたのは他作品の印刷形態に影響されざるをえない選集・全集版においてのみであって、単行各版ではすべて後続部分と同一の活字で刷られ（「オクシダン文庫」版では作品全体がイタリック体）、特に清書稿や初版においては頁変えも行われていない。なお、『演劇全集』版では、以上のような語りの重層性は、話者の介入の多くが下書きに転換されることによって結果的に簡略化されている。詳細は、前掲拙論「ジッドの『放蕩息子』の帰宅」―状況に想をえた小品―の（二）および（三）を参照されたい。

(58) Voir Claude MARTIN [non signé], «Pour une édition critique» [du *Prométhée mal enchainé*], *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 49, janvier 1981, p. 72.

(59) なお、初版から現在までの各種刊本ならびに各国語翻訳の書誌学的詳細については、前掲拙論『Essai de Bibliographie du *Retour de l'Enfant prodigue* d'André Gide』九五—一〇六頁を参照されたい。

(60) シンガーの一九〇七年三月一七日付前掲書簡には、校正刷点検の依頼を承諾したジションへの謝辞が記されている。

(61) したがって、たとえば次の事実もなんら驚くには値しない。つまり、「父」や「家」の表記に関してジッドが大文字と小文字を意識的に使い分けていることにはすでに言及したが、「Vater」Haus と、普通名詞を大文字で始めることを強いられたドイツ語版ではこの区別が全くされていない点である（リルケ訳も同様）。

【付記】 本稿の準備・執筆にあたり、カトリーム・ジッド女史、ドゥッセ文庫主任司書フランソワ・シャボン氏、パリ第四大学教授ミシェル・レーモン氏、リヨン第二大学教授クロード・マルタン氏、クルト・シンガーの包括受遺者であるクルト・ベーター・ランツマン氏、パリ近郊ブローニーニ在住の蒐集家アンディ・ロワイエ氏をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を頂いた。付記してお礼申し上げる。なお、本稿中に原文または日本語訳によって引用された未刊文献は、いずれもジッド女史の許可なくしては再録できない。Tous droits de reproduction et de traduction réservés. © Catherine GIDE.

《 RÉSUMÉ 》

Pour une édition critique du *Retour
de l'Enfant prodigue* d'André Gide

Akio YOSHII

Si la liste des études faites sur Gide est déjà bien longue, depuis près d'un siècle que celui-ci s'est offert à la critique, et si les ouvrages qui ne cessent encore de paraître apportent toujours quelques nouveautés de détail, on est sans doute loin d'avoir suffisamment pénétré l'œuvre de cet écrivain «*subtil, souvent un peu quintessencié, mais toujours original* [selon Paul Souday]». D'où notamment la nécessité urgente des instruments de travail fondamentaux, au premier rang desquels l'édition critique des œuvres principales paraît aujourd'hui indispensable aux philologues comme aux curieux d'analyses thématiques et génétiques.

A mi-chemin entre deux hauts sommets comme *L'Immoraliste* et *La Porte étroite*, *Le Retour de l'Enfant prodigue*, quoique supposé œuvre mineure, marque une étape non moins essentielle de cette conquête de la maturité par le futur maître de *La Nouvelle Revue Française* ; cela d'autant plus que, dans les années précédentes, Gide se sentait paralysé devant une persistante impuissance à produire. Travail préparatoire pour établir une édition critique de cette belle œuvre, le présent article se propose d'esquisser les aspects matériels de tous les *avant-texte* existants ainsi que ceux des éditions successives publiées du vivant de l'auteur et par conséquent susceptibles d'avoir été revues par lui.

En ce qui concerne les *avant-texte* en particulier, nous avons démontré l'existence de plusieurs copies dactylographiées dressées en 1907 pour la première publication ; et l'une d'elles est conservée : la dactylographie ayant servi à l'impression de l'édition de 1909 mais en fait alors réutilisée. De la première publication, nous avons également consacré quelques passages aux épreuves récemment découvertes par M^{me} Catherine Gide dans les anciennes archives de sa grand-mère Maria Van Rysselberghe. Ces deux documents, l'un cette fois-ci correctement daté, l'autre jusqu'ici inconnu, sont d'autant plus intéressants que, comparés avec le manuscrit complet, ils permettent de suivre tous les stades de la révision textuelle soigneusement effectuée et rapportent de précieux renseignements sur les différences de détail que la traduction allemande, faite sous le contrôle attentif de Gide pour une parution simultanée en deux langues, montre par rapport au texte original français.